

## 【コメント】

秋山 元秀

葛教授の上海についての報告は、上海の複雑な歴史を簡潔にまとめてあり、現在は世界有数の大都市である上海が、どのようにして生まれてきたのかについて、我々は明瞭なイメージをもつことができた。とくに我々にとって上海というと、近代になって急速に発展してきた都市であるというイメージが強いが、上海が近代になって発展した背景には、独自の長い歴史があることを知ることができた。上海がアヘン戦争後の南京条約によって条約港に指定され、それ以後、英国租界の設置にはじまり、アメリカ、フランスがそれに続き、租界がどんどん拡大して行ったのはよく知られるが、それでは英国は南京条約による5開港地になぜ上海を選んだかについては、必ずしも明確なイメージをもっていない。葛教授の指摘したように、その背景には、華亭県や青龍鎮という、長江三角州における中心都市の発達史があり、長江による内陸水路と、東南海岸からの海上水路とが交差する地点に立地するという位置がもつ有利な条件は、三角州の先端の中心地を交易中心都市として育てることになり、広東の粤海関と並んで江海関が上海に設置され、すでにアヘン戦争以前において上海は一定の広域中心としての地位を確立していたのであった。それは同時に英国の注目するところとなり、華南から華中・華北に進出しようとしていた英国は、アヘン戦争以前から調査を進め、上海こそが北上する拠点となるという信念をもっていたと考えられるのである。すなわち上海は、日本の横浜や神戸のように、開港によって突然現れた都市ではなく、その核となる中心地は歴史的背景をもってすでに存在していたことを確認することが必要である。このことは特に歴史地理的観点から重要であると考える。

しかし葛教授の報告は、決してこのような歴史地理的背景だけを強調するだけではなく、近代都市としての上海を広範な観点から描き出そうとするものであった。とくにこのセッションのタイトルにあるように、中国において外国文明の影響のもとでどのような新しい都市が生まれたかについて、明らかにしようとしたものであった。したがって私自身のコメントは、特に都市の空間構造、都市景観において、このような多様な文明がどのように具現されているのかという観点にしばって述べてみたい。

葛教授の報告にあったように、上海は開港のあと租界が設置されると、急速に人口が増加する。それには英国人やフランス人など租界を設置した外国の人口、また英国租界とアメリカ租界が合体して共同租界となると、日本人やロシア人など、近隣からの人口流入も目立つようになる。とりわけ日本人は急速に増加し、日本租界という実法的には存在しなかった名称で呼ばれるような地区を作り上げた。

しかし上海の租界地区の急速な人口増加を招いたのは、このような外国人の人口ではなく中国人の人口であった。当初は中国人が租界に住むことは禁止されていたが、太平天国の乱が起こり、江南全体の、とくに都市部の裕福な階層が乱を避け、外国の傭兵に守られて安全な租界に逃げ込むことが増える。さらに上海でもそれに呼応して小刀会の乱が起こり、これを避けて上海の県城からやはり租界に逃げ込む人口も急増する。結局このようにして上海の租界には大

量の中国人が流入し、外国人の居住区とは別に簡便で狭小な居住空間（現在でも里弄と呼ばれる）を作り上げる。租界の行政もこれを認めざるをえなくなり、公式に中国人による不動産売買も認められるようになるのである。

それではこのようなプロセスを通じて上海においてどのような空間構造ができあがっていったのか、外国人と中国人という区別だけではなく、中国人の中でも出身地による居住区分や職業による居住区分などがどのように形成されていったのか、それは今日どのようなかたちで残存しているのかいないのか、などの問題についてもっと詳しく知りたいと思う。あるいはそれらの居住区分に対し、何らかの差別のような感情があるのかないのかについても知りたい。同じ江蘇からの移住者の中でも、長江を挟んで蘇南と蘇北では、上海における社会的地位の違いがあるということはよく言われるが、そのような現象は他の地域においてもあるのだろうか。

もしこれらの違いがあるとするなら、それぞれの居住空間には何らかの個性、あるいは景観的な特色などがあるのだろうか。たとえば単純に見て、フランス租界とイギリス租界はまったく違う都市景観を持っている。そのような違いが、中国人の居住区の中にもあるのかないのか、あるいは後のプランニングはそのようなことも考慮しているのかどうか、このような問題について教えていただきたいと思う。

(滋賀大学教育学部)